美術鑑賞の語感
～日本文化のよさや美しさを味わう～

美術科　中馬　真里亜

はじめに

よさや美しさを味わうことが心豊かな生き方につながるという命題に向かうとき、子どもはどのような力をはたらかせて、よさや美しさを味わおうとするのかという問いがある。

よさや美しさを味わう活動は、美術の鑑賞の内容に含まれる[1]。画家や彫刻家の作品を鑑賞するだけではなく、仲間の作品も鑑賞する。また、制作途中の仲間の作品を鑑賞することもある。よさも美しさもまだわかっていないものに接する子どもが、それを味わおうとするための方法を考えたい。

授業の中で、子どもが「よさがわかる」と言う時、自分の好みに近い点や、作者の考え方と似ている点を理由に挙げる。一方、「よさがわからない」と言う時、嫌な感じがする点や、作者の考え方とは異なる点を指摘することがある。さらには、知っているし見たことのあるものだからわかるが、知らないし見たことがないからわからないと説明する場合がある。

成清美朝(2011)は、わかるためには、「共感できる自己体験、知的な蓄積・活動、嗜好の合致など、作品と鑑賞者の間に、なんらかのすりあわせが重要である[2]」と考えている。中学生の授業活動は、根拠にもとづいた思考を育てる場面がある。成清の説く「すりあわせ」の方法は、体験や知識の高まりを支える教育の意義と重なる。

また、ハーバート・リード(1955)の「人間意識の発展において、イメージがイデア（観念・思想）に先行する[3]」ということばがある。よさや美しさがわからないと言う子どもの中には、既にそのイメージが育っているにも関わらず、子どもがもっていることばでは表しきれない可能性があることを意識しておきたい。

米国にあるイザベラ・スチュアート・ガードナー美術館は、クリティカル・シンキング（批評的思考）の育成を目的として、来館した子どもが作品について、観察、解釈、評価等の活動を通して鑑賞の力をはたらかせる実例を報告している[4]。この活動は、子どもが調査にもとづいて論理的に解釈をすすめる点で、言語活動を必要としている。

美しさの意味内容をことばで整理していくことは、成清の述べた「作品と鑑賞者の間のすりあわせ」の場面で求められる。さらに、ことばはリードが示す、子どもが表しきれない「イメージ」を呼び覚ます「イデア（観念・思想)」となると考える。

そこで、ことばに対して感じる印象や、ことばを選ぶ感覚である語感に注目する。子どもが鑑賞する時は、自分の感覚に近い感じがすることばを選ぶ。その時、より多くのことばを集め、自分の感覚に最も近いことばを選び、使える幅を広げていくことを実践する。語感をはたらかせる活動が、子どもの美術鑑賞に与える影響について考察したい。

---

1 文部科学省『中学校学習指導要領』2008

2 東京藝術大学美術教育研究室編『美術と教育のあいだ』東京藝術大学出版会、2011、p.192（成清美朝『感じる力―アール・ブリュットにおける、ひとつの「わかる」について―』）

3 ハーバート・リード（宇佐見英治訳）『イコンとイデア―人類史における芸術の発展』みすず書房、1957

4 福原義春編『100人で語る美術館の未来』慶応義塾大学出版会、2011、pp.48-57

1　題材について

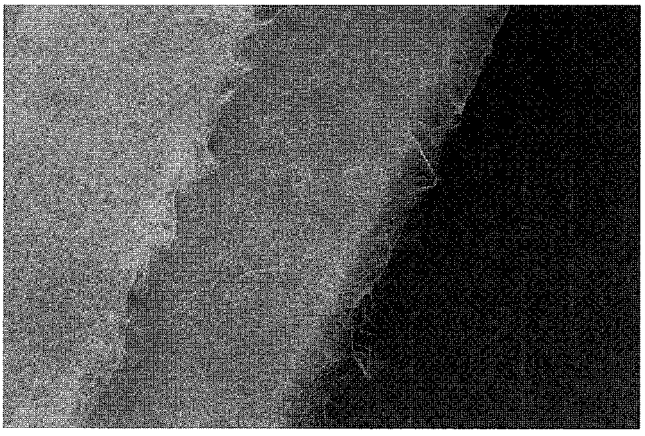
本授業は、紙の文化を題材とし、日本美術のよさや美しさを味わうことをねらいとする鑑賞の実践である。対象生徒は第３学年である。第３学年の年間カリキュラムでは、２学期に紙の立体を表現する授業を計画しており、その時の素材を扱った経験をつなげるねらいがある。

紙の文化の一つとして、日本の和紙を学ぶ。第３学年の学習目標にある日本の美術や文化の理解と、そのよさを味わうことを達成するため、和紙を選択した。また、本実践を行う 2014 年に、日本の手漉(てすき)和紙技術が無形文化遺産に登録されたこともあり、子どもの関心を深めるねらいもある。

和紙の文化として、「折形（おりがた）」を取り上げる。和紙の文化は様々なものがあるが、「折形」に関しては、戦後教育の場で取り扱われなくなったテーマである。この文化を選択した理由は、改めて教育的な意義を考えたい点と、子どもにとって初めて知る文化に出会わせたい点にある。

（１）和紙とは

和紙は、楮(こうぞ)、雁皮(がんぴ)、三椏(みつまた)を原料とする。冬に刈り取られた枝を蒸し、白い繊維質を手作業で取り出す。それらを漉き槽の中で紙の材料へと加工していき、竹簾を敷いた木枠で、繊維を一定の量ですくい取る。最後に天日干しで、和紙となる。



【図１】手漉き和紙の長い繊維

中国の蔡倫(さいりん)によって始められた紙は、『日本書記』によると６１０年、日本に伝えられた。その後紙漉きの技術は日本で独自に発展し、水処理の技術を使った「流し漉き」によって薄くても強くなめらかな和紙が日本各地で作られるようになった[5]。

和紙は、植物の繊維に見られる特有の風合いを持ち【図１】、丈夫で変色しにくく、長期の保存に耐える。

手漉き和紙で、儀式や包飾用で扱われるのが、檀紙(だんし)、奉書紙(ほうしょし)である。その他、屏風や襖絵等に使われる鳥の子紙、絵巻物や障壁画等に使われる雁皮紙(がんぴし)がある。

平安時代は、仮名の文章に合う色合いや装飾を凝らした料紙が誕生した。様々な色に染められた色紙や、文様を摺り出した唐紙(からかみ)等を組み合わせることによって様々な質感と色のバリエーションが生み出された[6]。

鎌倉時代は、絵巻物が多様化する。絵巻物は、横長の紙を水平方向につないで、長大な画面を構成することができる。「鳥獣人物戯画」や「源氏物語絵巻」等は、丸めて保存できる丈夫でしなやかな和紙によって、現代に生き生きと伝えられている。

紙によって生活空間を仕切る襖や障子は、保温性と通気性、光の透過性を生かしている。江戸時代には、桂離宮を始めとして、日本住宅の空間構成がかたちづくられた。

---

5 林功・箱崎睦昌『画材と技法』同朋舎、2001、pp.44-45

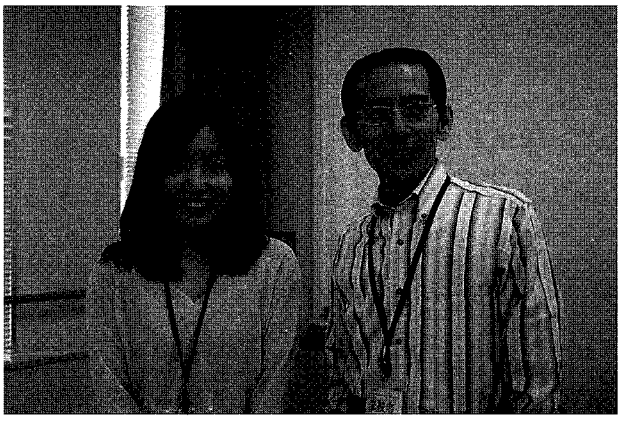
6 四辻秀紀『日本美術館』小学館、1997、pp.282-283

その他にも、紙の衣装がつくられたことや、てんぷらの下に敷く食器等、食文化においても機能を発揮した。和紙は、凧や折紙、うちわや傘などの数えきれない生活工芸品をつくりだした。日本では、手遊びや習慣の中で、折り方や組み方が教え伝えられた。新聞紙でつくる兜や、風車、七夕飾りなどがある[7]。

（２）折形とは

日本の和紙の文化を調べる中で、折形と出会った。中学校の教科書では紹介されていた記憶がなかったが、調べていくうちに、日本文教出版の高等学校美術の教科書に掲載されていることが分かった。出版社に問い合わせをして、折形について研究されている山根折形礼法教室主宰の山根一城氏のことを知った。

山根氏に連絡をとり、美術教育で取り扱いたい意図を伝え、本研究に協力いただける結果に至った【図２】。



【図２】折形の教育にも関心高い山根氏

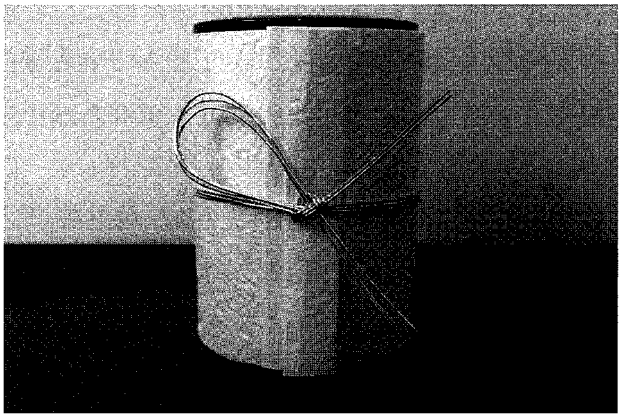
山根氏は、日本文化の教育的価値に対し大きな関心をもっておられ、折形文化に関わる資料を今回快く提供して下さった。

また、本実践のため、授業者自身も山根氏の講義を受け、折形の文化について学んだ。本研究における折形の解釈は、それらの資料をもとに構成している。

折形は、戦前日本で定着していた礼法の一つで、贈る物を和紙で包むその方法や、儀式などに用いられる飾りの紙を折る方法[8]の総称である。

礼法の歴史は、室町時代の武家の礼法として尊ばれ、江戸時代には一般庶民に広がった。その作法には特有の意味があり、それらの意味を折り方に表すことによって、贈る相手への感謝の心を伝える。

包む品のかたちによって折り方が決められており、贈り物を受け取った人は、折り方を見て中身が分かるようになっている。また、すべて包んでしまうことなく、一部が見えているように折る方法があり、贈りもののかたちと、包み紙のかたちが相互に関わる様子を見せる。



【図３】「陽」の品の包み方

その背景には、もののかたちを「陰」と「陽」に分ける考え方がある。円筒形で天に向かって垂直に伸びるものは「陽」の品【図３】、地面に対して水平に広がるものは「陰」の品の扱いとなる。自然物であれば、木の花を「陽」、草花を

---

7 尾川宏『紙のフォルム』求龍堂、1967、pp.11-16

8 山根一城『日本の折形』誠文堂新光社、2009、p.8

「陰」とし、既製品では、茶筒や瓶などの筒状のものを「陽」、本や折り畳んだ布などの平らなものを「陰」と位置づける。また、水引のかたちにも違いがある。「陰」は水平を表す両輪、「陽」は太陽を表す片輪である[9]。

人の手によってかたちをつくる時、自然界の生命のかたちを模倣することを優先している。人が独立して表現するというよりも、自然の恩恵の中で表現することに価値を置いている。

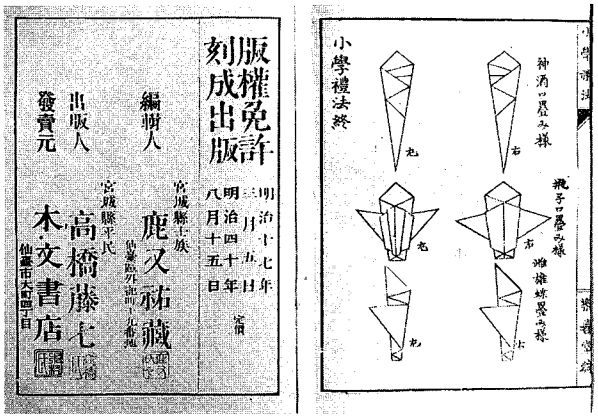
紙を折る際には、折り手より最も遠い紙の先を「天」、最も近い紙の先を「地」と称する。そして、「左」の「天」は太陽を表し、「右」の地から左の「天」に向かっている線のことを「吉」として尊ぶ。折形では、最後に折った折り目や線の端が「吉」の線になるように考えられており[10]、受け取る側の喜ばしい気持ちを象徴している。

このように、折形では、自然界を模すことによって、理にかなったかたちに重きを置く。それは、自然界に存在する法則（黄金比）を普遍的な美とする考え方である。

この美学が、贈り物を包む行為に影響を与えている点が特に興味深い。相手への尊敬や感謝、真剣な態度にある気高さを、近づき難くも親しみ深い自然の姿に象徴させる美意識だととらえる。

（３）折形の教育

江戸時代には、礼法や折形を勉強できる教科書が存在した【図４】。明治時代の教科書で折形に関しては、「物品の教授」で説明され、折り方、水引の結び方、渡し方、目録の書き方の他、折図を掲載している教科書もある。



【図４】「小学禮法」（山根氏蔵）

戦後、このような教科書は無くなった。教科書で教えられることが無くなり、挨拶の仕方やお礼の述べ方、お辞儀の仕方や、食事の作法などは、親から子へのしつけとして、学校教育の普段の生活の中で教えられることとなった。

食事をする時の「いただきます。」、「ごちそうさま。」や、お辞儀や座り方等、礼の心得はわずかに日本に残っているが、なぜそうするのかという理解については、薄まり、省かれ、欧米化している面は否めない。

折形のような、希少な素材を用いて時間をかけて行う礼法は、日本人の生活の中から消えていくことが懸念される。それは、和紙や和食が日常生活から減少していることと同じである。現代に生きる人々の意識は、安定した物流に支えられ時間をかけないで行動することへ向けられる。

２　日本文化の「よさや美しさを味わう」鑑賞

和紙や折形の日本文化を題材とし、そのよさや美しさを味わうことを目的とした美術鑑賞の授業を実践する。本授業では、子どもが美しいイメージに対してどのようなことばを発し、語感をはた

---

9 山根一城『日本の折形』誠文堂新光社、2009、pp.10-13

10 同上書、pp.14-17

らかせるのかを観察し、よさや美しさを味わおうとする過程を記録する。実践計画は、以下の通りである。

①日本文化との出会い…日本文化の研究者から学ぶ

②日本文化のことばを学ぶ…ことばの意味を知り、イメージとつなげる

③折形の体験活動…和紙に触れて、折る活動を行う

④日本文化の鑑賞…よさや美しさを味わう

①は、総合的な学習の時間で、学年一斉授業を実施した。山根一城氏の折形についての歴史と実技を学ぶ講義を行った。②と③は、美術の授業の第１次で実施した。④は、美術の授業の第２次で実施した。

（１）総合的な学習の時間

平成２６年１０月３０日（木）５・６時間目に、本校敷地内にある国際教育センター池田さつきホールにて、「折形教室～日本の伝統を学ぼう～」を実施した。

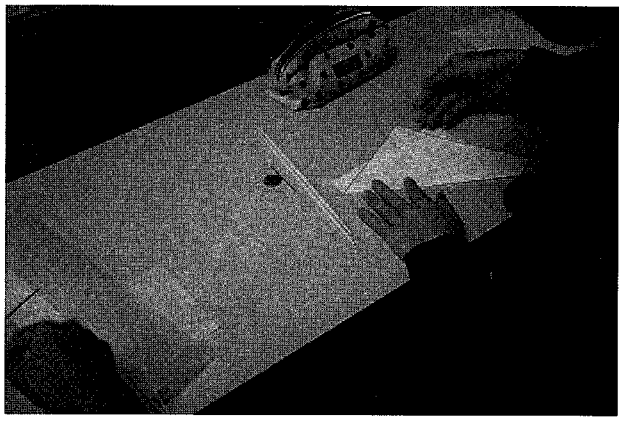
５時間目は、山根氏の資料をスライド表示し、折形の歴史や折り方の意味を解説していただいた。

【図５】檀紙の強さに驚く生徒

代表生徒が二人で檀紙を引っ張り合い、破ることができるか試す場面では全く破ることができず、びくともしない強靭な紙に、驚きの声が上がった【図５】。

６時間目は、かいしき（吉と凶）、箸包み、お辞儀と品物の渡し方の実技指導をしていただいた。かいしきの実技【図６】では、生徒はてんぷらの下に敷いてある紙のかたちに意味があることを知り、折り方に関わる用語を学んだ。

また箸包みでは、目分量で紙を折ることに新鮮な反応を示した【図７】最後に、お辞儀と品物の渡し方の実技を学んだ【図８】。普段生活の中であたりまえに行っていることの歴史的な意味を知り、改めてそれを学ぶことは、日本文化の再発見につながった。山根氏は、「戦後初めて日本で行う折形の授業である」と宣言し、生徒へ「伝統の後継者として大事に伝えてほしい」と伝えられた。



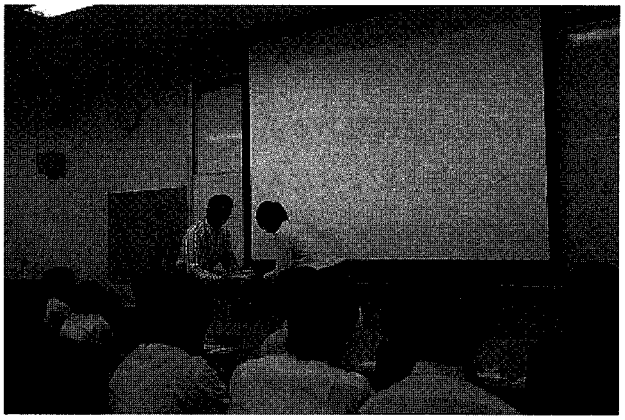
【図６】かいしきを折る

【図７】折るときは感覚にたよる

次に生徒の記述から、日本文化に対してどのようなことばで自分の見方を説明しているのかを考察する。

本授業の後に、日本の紙の文化について自分の考えをまとめる時間をとった。観点は自分で決め、自由記述としたので、文化を学ぶ上での子どもの最初の関心のあらわれ方をみていきたい。

体験や知識を中心に書かれた記述Aと、そこから自分の観点を導いて書いている記述Bにわけた。



【図８】お辞儀を改めて学ぶ

記述A

①日本は昔から紙を使い続けていて、現代でも学生だけでなく様々な人が使用していると思います。その紙の使い方も様々ですが、書く事が一番多いと思います。しかし、最近ではメールやSNSなどパソコンやスマホなどの機会を使って、紙に書く機会が少なくなっていることをこの授業で改めて感じました。

②僕たちが普段使っている紙はパルプのような、安価で手軽なものが多いけれど、日本には他国には無い、「和紙」の文化がある。和紙は作るのにも手間がかかるし、材料もそう簡単に、安く手に入るものではないからこそ、よさがたくさんあるので、少しでもそれを伝えていく助けができたらいいなと思った。

③日本の紙の文化は、日本食のように、これからも注目されつづけるべき事だと今回の授業を受けて思った。特に和紙の強度には驚いた。水にも強く、破れにくく、また色々な柄もあるので、最近のものにも十分に対応できるのではないかと思う。これからは昔のものと最新のものをかけあわせた新しいものができればいいなと思う。

④和紙はあまり見たり触ったりしたことは無かったけれど、本物の国産の和紙を実際に手にとってみて、これが８００年ももつのかと思うと、日本の技術は現在のものだけでなく昔のものもとても素晴らしいと思った。日本の紙の文化を伝承していくために、ただ飾るのではなく、歴史や作り方など多くの人に伝えていくべきだと思う。

記述Bは、和紙の文化の「よさ」として、①は記録媒体としての価値、②は希少性を挙げている。また③、④は耐久性に注目している。これらの見方は、対象をわかろうとするために、観察や知識の蓄積の過程にあたると考える。

記述B

①日本は、昔から森と共に暮らしてきたため、紙の文化は世界に誇れるほどすばらしい。たった一枚の紙に、精神を集中させ、相手のことを思って、紙を折って礼儀を尽くす。そこには日本人のよさがよく表れていると思う。このような紙の文化を、後世に伝えていかなければならないと思った。

②人の力では破れない紙や水にとけない紙のように、日本人は古くから紙を作る技術に長けていた。これは、日本人が紙のなめらかさや肌ざわりを好み、愛していたからだと私は考える。そして、この感情は私が和紙を好きなように今の日本人にも受け継がれていっているはずだ。私達は日本の紙の文化を世界に伝えていくべきだ。

③紙といえば、文字を書くものと考えていたが、折って気持ちを込めるという文化がいいと思った。他の国には無い繊細な文化を大切にしていきたい。私はアメリカに住んでいたのですが、紙飛行機というのは世界共通の遊びで、改めて日本の文化の幅の広さと深さを感じました。

④すべての文化において、有形な文化と無形な文化があると思う。「折形」の紙の文化では、古くから伝わる技術である有形な文化があり、折ったものに対する思いといったような無形な文化が両方存在すると思う。有形なものはいずれ消えるが、無形である紙の精神や気持ちを代々伝えていけたらいいと思います。

記述B下線部は、文化の背景にある人の姿にイメージをはたらかせている記述である。①～④では、文化の「よさ」として、それらを生みだす人の行為に対して価値をおいている。さらに②は、人の感情に意識を向けている。

森口多里は、「美的価値をもつフォルムの品格として感受される『人間』は作者個人であるとともに普遍的な『人間』でもある[11]」と述べ、鑑賞者はその普遍的な人間に触れることによって自己を一時的に高めることができると示している。

子どもの語感がどのように変化し、個々のイメージを確かなものにしていくのかを観察する過程で、美しいものと関わって生きようとする人間の行為への関心を高めることを鑑賞の目標におきたい。

（2）美術鑑賞の授業

全2時間の計画である。学習指導要領の、B 鑑賞（1）ウ「日本美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり、それらの作品を鑑賞したりして、日本の美術や伝統と文化に対する理解と愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違と共通性に気付き、それぞれのよさや美しさなどを味わい、美術を通した国際理解を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めること。」と関連する。

第1次では、折形で使われることばの意味を知り、自分のイメージとつなげる活動である。前述した、「陰・陽」、「天・地」等の自然を象徴することばの、意味を確認する。日本の自然環境をふりかえることや、季節の行事で使われる紙の造形物を思い出し、そのかたちの意味を確認しながら、漠然としていた文化の美しさに迫る。そして、折形のかたちから感じるイメージを、ことばでまとめる活動を通して、再度自分のイメージへと循環するように展開する【図9】。

---

11 森口多里『鑑賞教育』美術出版社、1960、pp.123-124

「折形」のこころえ～日本の美しいかたちを伝えよう～　　第一次

（目標）折形文化を学ぶことを通して、折形のかたちのよさについて考える。

（展開）

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導入	・生徒による「かいしき（吉と凶）」づくりを鑑賞する。 ・「日本の美しいかたち」とは何か、関心を持つ。 ・折形の理解を通して考えることを目指す。	・「折形教室（総合的な学習の時間）」での学びをつなげることに関心を持たせる。 ・折形の理解を通して「日本の美しいかたち」について自分の考えをもつことを課題設定する。	
展開	・「折形教室」を振り返りキーワードを挙げる。 （キーワード） 天地　左右　吉凶　紅白 陰陽 ・小物包みを知る。 ・和紙の風合いと色について学ぶ。 （キーワード） 檀紙　奉書紙　楮 四季 ・「日本の美しいかたちを伝えよう～箸包みを贈る～」 贈りたい人 箸包みの練習 和紙の選択	・学びに通じるキーワードを導き出させる。 ・小物包みの体験を通して、和紙の風合いと色の学びが深まるようにする。 ・生徒が主体的に贈りたい人を考え、和紙を選ぶことができるように支援する。	・日本美術のよさを味わい、主体的に伝統文化の理解を深めようとしている。 （ワークシートへの記録）
まとめ	・折形のかたちのよさとは何かを考える。	・生徒が見いだした折形のかたちのよさが、次回、日本のかたちの美しさへと高められるようにする。	・折形の造形的なよさや美しさについて考える。 （ワークシートへの記録）

【図９】第１次の授業計画

授業のまとめで、生徒は「折形のかたちのよさ」について考え記録した【図 10、図 11】。かたちとは、造形的な見た目だけではなく、様式などのふるまいという意味も含んでいる。生徒がよいと思ったかたちを伝えるためにどのようなことばを選び、語感をはたらかせているのか観察した。

✿「折形」のかたちのよさは、どのようなところにありますか。

①持ち運ぶときに、軽くて便利で、形状がシンプルで美しい。日本人の着物の懐から取り出しやすい。
②贈られる側のことも考えられているところ。形にそれぞれ意味があるところ。
③かたち一つ一つに意味があり、言葉じゃなくても意志が伝わるところ。
④なんらかの形に決まりがあり、きれいに見えるところ。
⑤整っていてきれいである。また紙の端をしまうなど美しさもある。
⑥右が上にくるように折るという、昔の人が考えた配慮や縁起の良さが実感できるところ。
⑦かたちの線の向きだけで吉や凶を表し、相手に対しての気持ちを表すことができるというところ。
⑧かたちが吉凶を考えられているうえに、相手のことを重んじたかたちになっているところ。
⑨シンプルでかつ折られている部分の見た目の美しさ。きりっとした角度、見栄え。
⑩心をこめて、丁寧に折ったことが目で見て分かるし、伝わるところ。
⑪日本の礼儀を紙で伝え、縁起や思いを大切にするところ。
⑫角がしっかり立っていて、メリハリがあるところ。左右が考えられ、相手が良い気持ちになるようにという思いやりがあるところ。
⑬美しい直線美と、和紙の色のコントラストが、見事に調和して、美しい造形を織りなしている点。
⑭丸みがなく、角がたくさんあるので、整った形になる。少し厳かなイメージ
⑮相手のことを思いやって考えられている形で、使いやすく、かつ美しいかたちであること。日本ならではの伝統的な考え方が表れていることがわかるところ。シンプルだけど計算されて整った美しさがあるところ。
⑯折紙と違い、相手のことを気づかったかたちであることが良さだと思います。
⑰はしがピシッとしていて、きちんと折れば紙と紙ともキレイにかさなるのですっきりとするところ。
⑱シンプルで無機質だけど、辺の比が絶妙で美しい所。
⑲昔から究められつづけてきたものなので、決まった作法がありながら、シンプルで美しいところ。
⑳中に物を入れた時に、少し丸みが出て、優しさや温かい印象を与える。
㉑シンプルな感じのものが多く、折りやすい。日本の「美」を象徴しているものだと思う。
㉒曲がっているところやしわがなく、平らな紙と直線だけで構成されているところから、洗練された日本の文化の良さがあらわれていると思う。
㉓すごく無機質であり、かつ単純な形・色彩であるが、本当にすごく考えられていて、決まりにもとづいているところ。見た目以上にメカニズムが難しい。
㉔完璧ではなく手で折った温かみがあり真心がこもっていると相手に伝わるところ。
㉕角がきっちりそろっていて、ぴちっとしていて崩れがないところ。
㉖全部右が上と決まっていて、左右対象のようできれいな形であるところ。
㉗昔から受け継がれてきた考えが形となってそのまま伝え継がれたというのと、かたちが意味をなすということ。
㉘全てが直線でスタイリッシュであるところ。
㉙シンプルな形で、すっきりしているところ。直線がきれいなところ。
㉚色を生かして、その空間を演出することだけでなく、機能面でも紙でつくったのにも関わらずしっかりしているところ。
㉛ちょっとした飾りがあってどうなっているのか興味がわく。
㉜縁起をとことんかついでいて、相手が開きやすいようになっていたり美しくみえるようになっていたりと細かいところに思いやりを感じられるところ。
㉝無駄なところが一切なくてシンプルであるところ。見た目がきれい。
㉞「折形」のキーワードを受けとる側が知っていると、よりその形から感謝や尊敬の気持ちが伝わるところ。
㉟和紙で人のあたたかさが伝わっているところが良い。
㊱長い歴史の中で、使いやすく、美しく洗練されたかたちが日本の「美」を表しているところ。
㊲少しだけ赤色がみえたり、シンプルで美しい。それぞれの折り方に意見があって手軽に折ることができる。
㊳右の地から左の天へといった、ななめの線が美しく表れている。また、折り目のすき間を活用して、きれいに、折り込まれている。
㊴折りやすいように、また、見栄えも良いよう、折る度に、間をあけるのを意識されているところ。また、機能性も高いところ。
㊵相手のことを思って、できるだけ開いたり使ったりしやすいように工夫されている。また、角と直線がはっきりしていて、とても上品で厳かにみえる。

【図 10】生徒の記述（40 人クラス）

鑑賞の際に生徒が頻繁に使用する「シンプル」ということばは、本授業でも頻出のことばである。また、よさを説明する際に「きれい」と「美しい」ということばを使う場合も多く、これらのことばが、感覚の前に物事を完結してしまい、わかった気になってしまった生徒が、対象に迫ろうとしない課題をもたらす傾向にある。

【図 11】自分の感じたことを伝える

①は、実際にそのものを手にし、それを生活の中でどのように利用するのかを体験を通じてもった認識と判断される。④は、口頭では詳しく考えを説明するが、記述になるとあまり書かない生徒の記述である。美術の鑑賞では、当然ことばの深まりを評価する目的はないので、④の生徒の関心のあらわれ方の変化を観察する必要がある。その生徒が、美しさについて感じ取り方をどのように深めているのか、活動を取り組む様子や、話をしていることを聞き取る等のコミュニケーションが必要である。

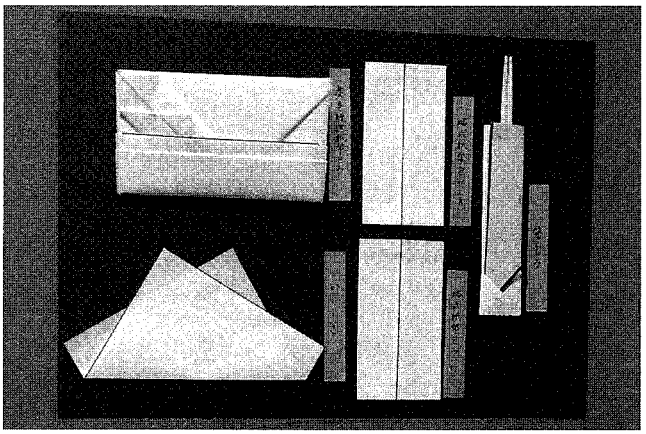
人の心や思いに注目したことばは、③、⑦、⑩、⑪、⑫、⑮、⑯、㉔、㉜、㉞、㉟、㊵にある。折形の造形的な見た目ではなく、人と人の間で交わされる文化への関心、あるいは感動をもったと判断していく。

よさや美しさを味わう着眼点として、上記のことばに加え、⑳、㉚の下線部に注目する。⑳の生徒は、折ることが平面であるという先入観をなくして、折ることによって見つけたふくらみに何らかの感動を示している。また、㉚の生徒は、この授業では触れていないことばを用いているが、このことばを使う根拠の一つとして、２年生の時に取り組んだ空間を演出する題材を経験したことが挙げられる。子どもが表現や鑑賞の体験を重ねて、ことばを系統的に活用していく過程が観察される。

これらの第一次の生徒のことばを、第二次の鑑賞の時間につなげていき、それぞれの生徒の認識の変化を記録していく。

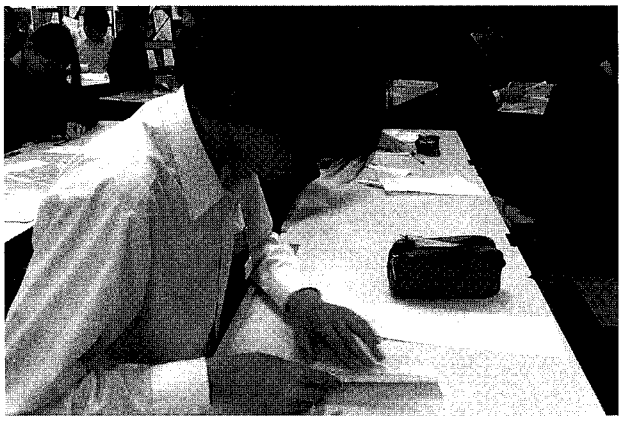
第２次は、かたちのよさから見いだした美しさについて、自分のことばをまとめる活動を行った。習得した折形を一定の時間で折り、その時の感覚やできたものを見ながら、ことばをまとめていく。授業を展開する導入では、本時で使用する和紙の理解や、折形の掲示によって、生徒の関心を高めるようにした【図 12、図 13】。

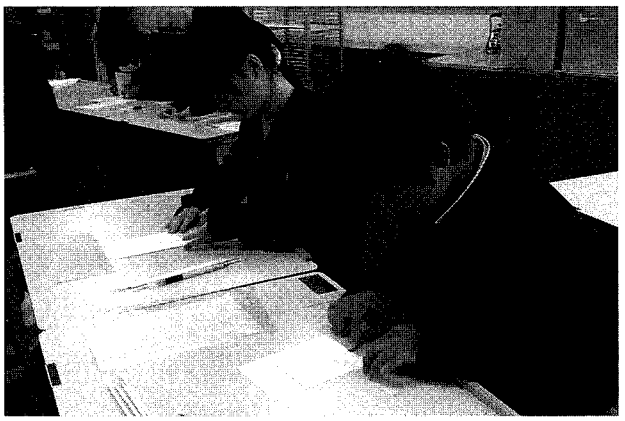
【図 12】本時の和紙を確認する



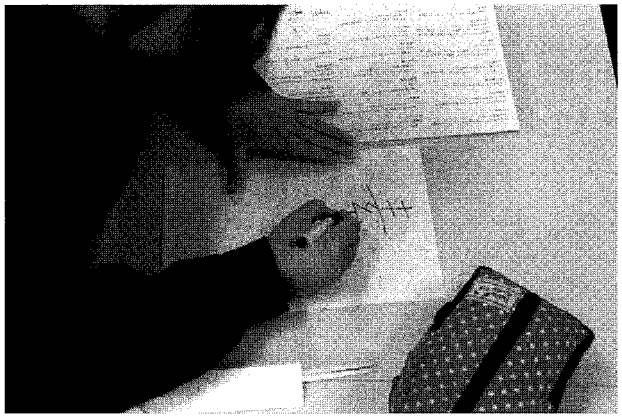
【図 13】身近な折形の掲示

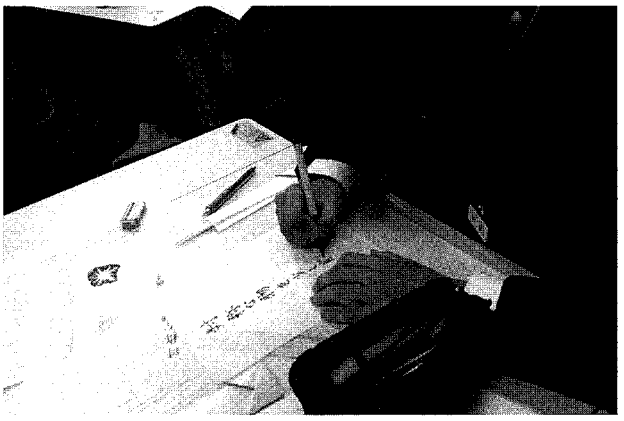
本授業は、折る体験を通して、日本文化を鑑賞することがねらいである。和紙の質感を感じながら、和紙の「天地」を意識して折り上げる時間は、集中を必要とする。折り上げる紙の辺の長さは全て感覚にたよるので、自ずと姿勢を正して手を慎重に動かす様子が見られた【図 14、図 15】。





【図 14、図 15】感覚で折る

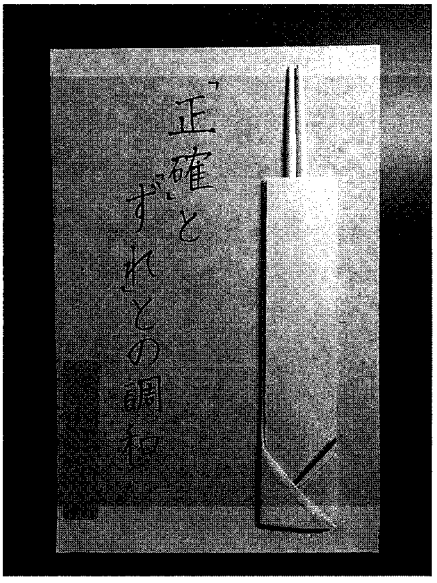




【図 16、図 17】感じ取った美しさをことばで伝える

次に、自分で折った箸包みを置いて、和紙に「日本の美しいかたち」をことばで書く活動を行った。第 1 次に仲間が記述した折形のかたちのよさについてのことばを読み、改めて美しさという観点でことばを見いだしていく。他の人の語感に触れることで、多様なことばを介して美しいイメージが表せることを知る。そして、自分のイメージに最も迫ることばを選ぶことで、そのもののよさと美しさに迫る活動を支援する【図 16、図 17】。

本時では白い和紙と、筆ペンを用意し、生徒が伝えたいことばを残すようにした【図 18、図 19】。自分が作った箸包みを右に置いてことばとともに見るかたちである。鑑賞のことばを記すまでの思考の場面は、想定以上に時間を要した。特に、和紙と筆ペンで書き残すことが、より緊張感を与えたと判断している。書き出しまでに余白や文字の大きさなどを考えることや、練習しようとする生徒が多く見られた。



【図 18】鑑賞のことば～日本の美しいかたち～（生徒制作）

本時：「折形」のこころえ～日本の美しいかたちを伝えよう～　第二次

（目標）自分の価値意識をもって作品を味わい、日本文化のよさや美しさを主体的に伝える。

（展開）

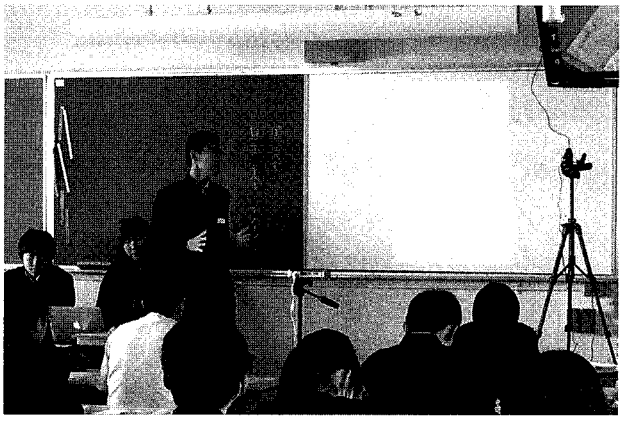
学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導入	・「日本の美しいかたちを伝えよう～箸包みを贈る～」を目標にする。 ・和紙の印象や素材、箸の素材を確認する。	・日本の美しいかたちについて自分はどう解釈するのかを課題とする。 ・和紙と箸の素材を確かめさせる。	・日本美術のよさを味わい、主体的に伝統文化の理解を深めようとしている。 （ワークシートへの記録）
展開	・箸包みを折る。 [主題をつくる時間] ・右端に箸包みを縦置きにして、「日本の美しいかたち」とはどのようなかたちかをことばで書き、記名する。 [かたちを解く時間] ・他者の作品を鑑賞する。 ・代表者は、「日本の美しいかたち」について自分の考えを伝える。 [分かち合う時間] ・代表生徒が、贈る相手と対面しながら折形を実践する様子を全員で鑑賞する。	・相手を思い折ることを意識させる。 ・前時の資料を参考にしながら、自分のことばを意識させる。「美しい」と「かたち」のことばは使わないことを指示する。 ・生徒作品を投映し、全体に共有できる環境をつくる。 ・作品とともに生徒の発言に関心を持たせる。 ・日本の手渡し方の文化について触れる。 ・人と人のつながりに注目させる。	・折形の造形的なよさや美しさについて考えたことをもとに、表現の構想を練っている。 ・素材の特性をいかし、制作の順序を総合的に考えながら見通しをもって表現している。 （箸包みとことばの展示）
まとめ	・「折形のこころえ」として自分はどのように向き合うべきかをまとめる。	・世界の中の日本の誇れる文化として考えを深め、主体的に伝えていくことに意味を見いだせるようにする。	・折形の造形的なよさや美しさの見方を深め、自分の価値意識をもって味わっている。 （ワークシートへの記録）

【図 19】第２次の授業計画

各々の生徒が感じ取ったよさや美しさについて交流する場面では、ことばと箸包みを総合的に見ることができるようにした【図 20】。また、できるだけ多くのことばを紹介するために、iPad を使ってそれぞれの制作物をスクリーンに投影して、共有できるようにした。

仲間が、感じ取ったよさや美しさについて、ことばを通して知り合うことから、互いがもっているイメージに触れる。

自分が漠然と実感していたイメージを、他の人のことばが言い当てるような場面や、自分のことばを伝えることによって、改めて認識したことを実感できる場面を設定することがねらいである。



【図 20】美しさについて味わったことを伝え合う

3　美術鑑賞と語感の考察

第２次の制作物をもとに生徒が感じた日本の美しいかたちをまとめた【図 21】。短文を上方に、長文を下方に配置し、精神性に触れる記述を左、ものの形状に触れる記述を右寄りに配置した。

誠　真　絆　愛　　歴史　大吉

律儀　真心　敬意　願い　拝謁　思い　　静寂　柔軟　生粋　素朴

こころ　人の心　　鋭い

思いやり　意志伝達　あたたかさ　思いを大切に　　清々しい

尊敬の意　心の伝承　思いを包む　おもてなしを伝える　　伝統の継承

真っ直ぐな心　無言の表敬　計算された意志　　隠された礼儀

おだやかな誠心　まっすぐな思いやり　無駄のないぬくもり　心をつなぐ直線

送り手の気持ち　無機質な個性　余計なものは排除　自然と尊ぶもの

心のやわらかみ　気づかせない気づかい　　自然であたたかい

思いのあたたかみ　相手を重んじ配慮する　　無駄のないメッセージ

相手を思いやる心　単純でも心が伝わる　　思いと同じの真っ直ぐ直線

無駄のない真の心　思いやりがあり無駄がない　あたたかみがありやわらかい

全人類に共通する心　具現化されたおもいやり　「ずれ」がまごころを伝える

人の心の奥にある純粋さ　相手に思いを伝えることができる　　力強さのなかにある優しさ　　厚さとやわらかさにあるあたたかさ

ていねいに作ろうという心がけ　　人のつくるかたちが自然にとけこむ

にじみでてくる人の心のあたたかさ　　手で折られているのに正確さがある

まごころをまっすぐ伝えたいという想い　　心にも物にも紙一枚にも落ち着きがある

お世話になったことへの精一杯のおかえし　　高貴で厳かな中に人の温もりが感じられる

自然の恵みによって作りだされる秘密の空間

無駄がなく整い、洗練された細やかな気づかい

なんの飾りがなくても作り手の気持ちが伝わる

自然にあるがままのものに人のこころをこめられる

素材を生かし、気持ちを込めて丁寧に作られたもの

不規則ではあるが、その中にあたたかさを見いだせる

計算された角度と直線で構成されていて相手のことを重んじている

変化　完璧　自然　　単純　和紙

シンプル　　重なり

左右非対称

共存　非対称の魅力　空間を大切に　直線的な清潔さ

他を魅せる　上品で厳か　角をつくる直線　　二つの紙の厚み

自然との調和　単純だが奥深い　　なめらかな曲線

自然なきれいさ　ありのままのかたち　　対称の中の非対称

やわらかい直線　自然と貴ぶもの　　対称ではない整い方

鋭く優しい角と直線　完全に整うことのない自然　線と角の組み合わせ

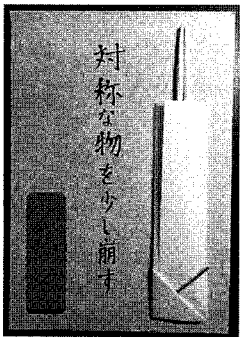
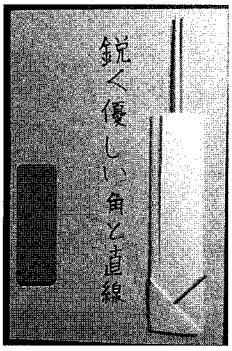
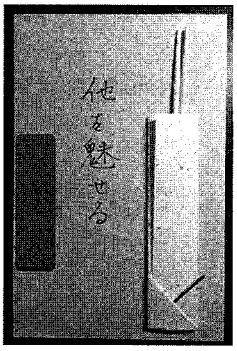
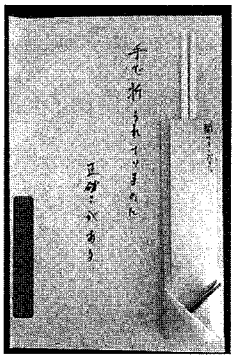
直線の中にある温かみ　　対称のものを少し崩す

直線の表現するやらわかさ　　かたちとかたちの重なり

相手を重視したメカニズム　　「正確」と「ずれ」との調和

折り目の感じるあたたかさ　　折った時にできるわずかな余白

【図 21】日本のかたちにみえるよさや美しさに関する生徒の記述

	生徒Aのことば	生徒Bのことば	生徒Cのことば	生徒Dのことば
第1次鑑賞　「折形のかたちのよさ」	少しミスをすると失敗なので、完成品は折り目がきっちりと仕上がるところ。	素朴だが、しっかりしていて、つくった側のていねいさがよく分かり、気持ちがこもりやすいということ。	無駄な装飾がなく、シンプル且つ自然なかたちであるところ。	なんらかの形に決まりがあり、きれいに見えるところ。
第2次鑑賞　「日本のかたちの美しさ」授業前半	中途半端ではなく、一つ一つの手順がていねいにされたことがわかるような形。 対称な形を少し崩してあるかたち。	形が線がたがたしていなく、直線なら直線、曲線なら曲線としっかりした形のもの。	形が複雑でなく、シンプルで自然。線対称や点対称ではないような、ズレがあったりなど、不完全なかたちを成している。 つまり、そのものが、それ以外のもの（今回でははしを引き立たせたり、人がそれぞれの美意識をもてるように	たくさんある折り方の中に共通する規則があり、なんらかの共通点があり、うつくしい。 機械でなく手で折られているものなので形に差異がある
第2次　「日本のかたちの美しさ」授業後半				

【図 22】生徒の鑑賞のことばの経過

生徒が第１次、第２次と記録した鑑賞のことばの経過から、鑑賞の力が語感とともにどのように変化しているのかを考察する【図 22】。

生徒Ａは、第１次の実技の中で、「ミス」した時に、和紙についてしまった折り目を気にした。余計な折り目がついていない包みの姿を「完成品」とし、その姿に価値をおいている。第２次の授業前半では、「手順」の「ていねい」さに注目し、「中途半端」を行為から除いた。ここで、折形に見られる左右対称でない点や、目分量で余白を残して折るなどの特徴が、第１次で感じたことと矛盾することに気付く。「完成品」だが「少し崩してある」矛盾に対して、日本文化の美しさを感じ取っていると考察する。

生徒Ｂは、第１次は、かたちの「素朴」さについて、「気持ちがこもりやすい」という価値を見いだしている。第２次の授業前半では、「素朴」について「直線」や「曲線」がどんな印象なのか具体的に書きだしている。そして「角」と「直線」がつくりだすかたちに価値をおいた。授業後半では、「角」や「直線」という「鋭い」印象の先入観を覆すかたちで、「優しい」という価値をおいている。これは、手触りが「優しい」和紙に実際に触れた経験が影響していると考察する。

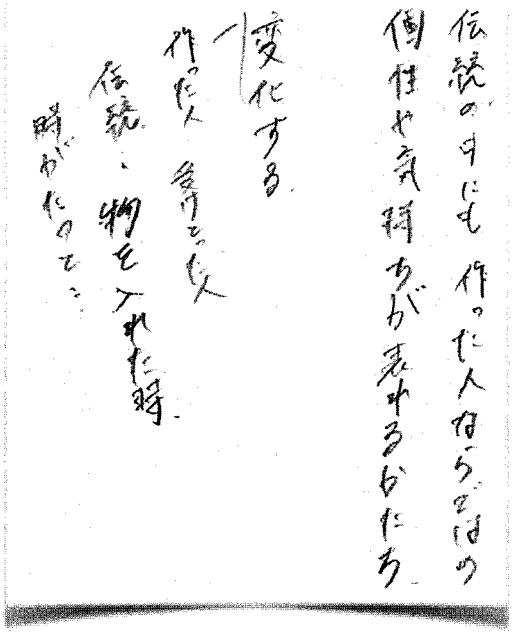
生徒Ｃは、普段造形活動に興味関心が高い生徒である。第１次では、折形の造形的な面に強く興味を示し、その単純な形態に迫っていることが分かる。第２次授業前半では、その「シンプル」で「自然」なかたちについて考えを深め、そのものだけでは「不完全」であるとみている。そして、「不完全」なかたちをしている理由として、他のものを「引き立てる」役目を果たしているのではないかと推測している。授業後半では、「魅せる」ということばをつかって、他のものを「引き立てる」姿に美しさを味わっていると考察する。

生徒Ｄは、**２（２）**で紹介した④の生徒である。第１次では、「きれいに見える」と記述し、具体的な観点が判断しにくかった。第２次授業前半では、第１次で感じた「なんらかの決まり」を「共通している規まり」と表記し、その共通性に美しさを感じていることがわかる。「手」仕事ながら「正確」であることが印象に残り、授業後半では、その点をことばにまとめている。人の手づくりのものの正確さに驚きを感じていることを考察する。

第２次授業前半は、クラスの仲間の第１次の鑑賞のことばを交流した後の記述になるので、自分の考えを客観的に評価し、かつ他者の感性に触れた中で深められた結果がみられる。

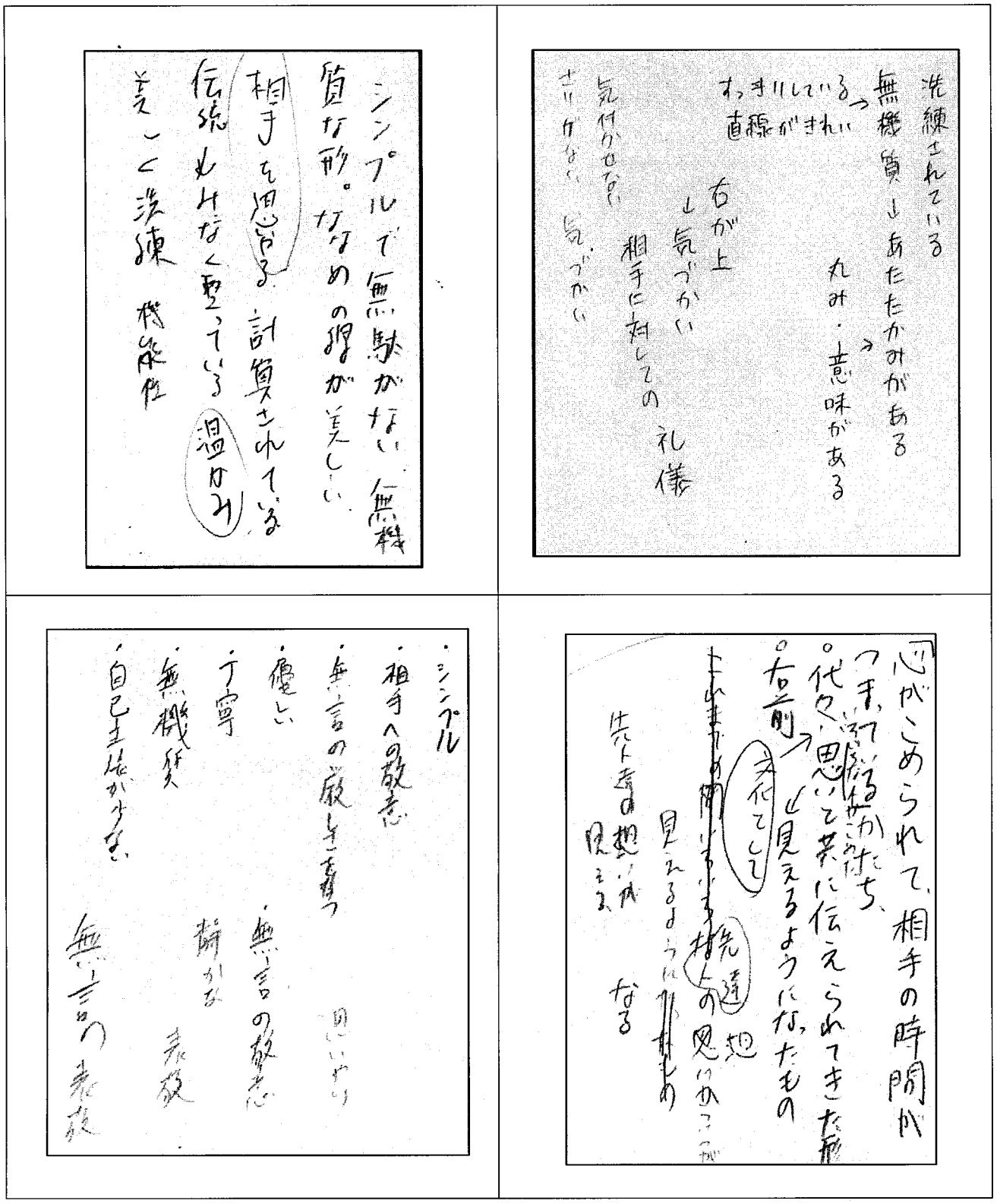
ことばに対して感じる印象や、ことばを選ぶ感覚である語感が、授業の過程の中ではたらくことによって、子どもは自分の感覚に近い感じがすることばを取捨選択する【図 23】。

その時、授業で仲間の選んだことばに触れることや、自分の選んだことばを振り返ることによって、感じ取ったよさや美しさのイメージを伝えることばの幅を広げていく。



【図 23】第二次前半　生徒の鑑賞のことば

本授業の題材は、状況を推測できる絵画や写真ではなく、作者の個性が見える造形物でもない、文化の美しさである。



【図 24】第二次前半　生徒の鑑賞のことば

つまり、個人の意図よりも、日本人の普遍的な精神性や美意識に触れる題材である。本実践は、子どもが体験やことばの構造化を繰り返しながら、自分の美しいイメージや感覚に迫ることができるように、鑑賞のことばの経過に注目した【図 24】。

以上、子どもがよさや美しさを味わおうとする一つの方法として、語感をはたらかせた記録をもとに鑑賞の力を高める実践を報告する。

4　実践の発表

本実践は、2014 年 11 月 22 日の本校研究発表会と、2015 年 1 月 20 日から 25 日の期間開催された CGAT 展（小中学校の図工・美術の授業と子どもの作品の展覧会）において発表した【図 25】。

【図 25】CGAT 展出品ポスター

おわりに

中学校美術の教科書は、江戸時代の画家である伊藤若冲の作品について、そのよさや美しさを紹介している。しかし、もとは流派にとらわれない独自の画風を確立した人物であり、日本美術史上では異端とされた画家だった。

同時代の岩佐又兵衛、曾我蕭白をはじめ、注目を得なかった画家達の表現のよさや美しさを改めて広く伝えた人物が、美術史研究家の辻惟雄である。

辻は、それらの画家達を「奇矯で幻想的なイメージの表出を特色とする画家[12]」という意味の「奇想」ということばでまとめて再評価した。辻がはたらかせた語感は、それまでよさや美しさがわからなかった画家達の表現に光をあて、鑑賞者がよさや美しさがわかるような観点を明示した。辻は多くの人に表現の美しさを伝えるために、「奇想」ということばに付加価値をつけた。彼は「〈奇想〉という言葉は、エキセントリックの度合いの多少にかかわらず、因襲の殻を打ち破る、自由で斬新な発想のすべてを包括できる[13]」ことを意味していると述べ、日本の古き絵画に、近代の美的感覚をみた感動を伝えた。

これは、あることばによって、鑑賞者が表現のよさや美しさに焦点を絞ることができるようになる一例である。自分が発見した感動に最もふさわしいことばを伝えながら、普遍的な美しさのイメージを共有していくことは、豊かな感覚や感動を得ようとする人間の行動を象徴している。

授業で日本文化の鑑賞を行うことは、文化に関わる用語を知識として学ぶだけでなく、一人一人の子どもが感じ取ったよさや美しさにつながる語感を記録することが求められる。それは、子どもが先に感じ取っている、あるいは感じ取ろうとしている漠然とした美しさについての「イメージ」を、後に表出されることになる「イデア（観念・思想）」によってくみ上げる活動である。

こどもの作品や鑑賞のことばは、くみ上げられたイメージが満ちる器である。

---

12 辻惟雄『奇想の系譜』ちくま学芸文庫、2004、p.241

13 同上書、p.242